

『ソク・サバーイ！ 続カンボジア・サッカー見聞録～牛の
向こうに未来が見える～』 Vol. 8

● J F Aサッカー1級審判インストラクター 唐木田 徹



高校グラウンド

みなさん、こんにちは。

前回、この時期はカンボジアでは涼しい季節、とお伝えしましたが、中国正月が終わると、あっという間に普通のカンボジアの気候になりました。天気予報は毎日気温35度～25度、天候晴れ（たまに晴れときどき曇りのときあり）です。

さて、今回のお題は二つ。

まず、前回の「HUN SEN CUP」の続きです。

4つの州に分かれて行われた予選リーグに続き、ベスト16による決勝トーナメントが始まりました。昨年は、ここから外国人が出場可能となり、CPL所属のチームと地方のチームでは歴然とした力の差があり、1回戦は概ね大差のゲームになりました。しかし、今年は外国人に出場資格が与えられなかったため、思いのほか差がつかず、あるいは押されながらも凌いで僅差のゲームが見られました。



砂地と草地の段差、わかりますか？

そんな中、CPLのチームに地方のチームが食い下がり、リードされては追いつき、後半もロスタイムに同点として延長に持ち込む健闘を見せます。そして、延長で初めてリード！CPLのチームは、いら立ちのあまり反則を繰り返し、警告者続出。さらにリードが2点となって、もはや試合を捨ててラフプレーの連続。結局14枚のイエローと4枚のレッド（1発レッド2枚）が飛び交う、清々しさのかけらもない試合でした。

この試合は、昨年まで副審だった若手を、予選リーグで主審の能力チェックをしたのちに抜擢しました。判定はほとんど正しいし、選手との対応、コミュニケーションも的確に行っていました。それでも反則を繰り返し、警告されても止めないのは、残念ながら今のカンボジアサッカーの一つの特徴です。なぜ自制心が働かないのか？理由の一つに大会規則の不備があります。リーグ戦であれば、退場者は次の試合は出られません。警告も累積していきます。しかし、ノックアウトトーナメントやリーグ戦の最終戦での退場は「次の試合がない」ので、よほどの行為でなければ実質お咎めなしで終わってしまいます。



試合前の水撒き。1カ月半、雨は降っていません

準決勝も見ていてうんざりしました。CPLでいつも優勝を争うライバルチームの戦いは、予想に反して前半に3点のリードがつきました。その前半終了間際、ゴール前での小競り合いで、負けているチームの選手が顔を抑えて倒れます。主審は相手選手を警告しますが、チームの監督は選手を引き揚げさせます。あとで4th オフィシャルに聞いたところ、「PKだろ」「アウトオブプレー（コーナーキック前）だからPKではない」「退場だろう」「警告だ」、というやりとりがあったそうです。結局、12分の中断後、再開されました。

この試合は、午前中にマネージャーズミーティングを行っていま

す。チームは口を揃えて、「いい審判を割り当ててくれ」と言います。私は「我々はすべての試合に Tuy Vichhika, Tuy Vichhika, Tuy Vichhika……を割り当てすることはできないし、する気もない（日本でいえばオール西村雄一）。どうかすべての選手、審判がお互いを尊重し合って良いゲームを作り上げて欲しい」と話しました。

あのミーティングは何だったんだ!!

これに関して、「プノンペンポスト」という新聞が、「去年のCPLプレーオフでも他のチームが選手を引き上げる行為をした。いいかげんにこのような幼稚な行動は根絶してほしい」と、記事を書いていました。

ごもっとも！

ただ、この件では審判団にも不満が残ります。去年のケースは、経験の少ない若手が主審で、どうすればよいか分らずに処理に手間取りました。このことを教訓とすべく、「このようなケースでは、監督もスタッフも選手も興奮しているから少し時間をとっていい。自分の判定を手短に説明し、たとえば『2分待ちます。その間に選手が戻れば試合を続けます。戻らなければ試合をうち切ります』と伝えなさい」という指針を示したはずなのですが、残念ながら主審

および審判団はただ推移を見守るだけでした。また、このようなケースでマッチコミッショナーが介入・処理することもあります。カンボジアではその他の人たち、連盟のエグゼクティブメンバーたちがぞろぞろと集まって、何やら話し合います。本来関係ないのですが……。



テントの屋根がフィールドに……

さて、試合はというと……。後半、クレーマーチームが猛反撃！リードしているチームに 1 人退場者がでたこともあり、3 点を奪い同点。さらに、終了間際に PK ゲット!! これで逆転したら、それこそ大問題です。私の「正しい結果になるように…」との祈り？が届

いたのか、GKが見事にセーブ!!!延長も得点なし。PK方式で最後は「正しい方」が勝ち、決勝に駒を進めました。

ほっ……。



主審、副審1は新FIFA（高校教師）

さて、もう一つは高校の話題。

翌日は高校の決勝戦。全国大会の地区決勝のようです。場所は市内の高校のグラウンド。デコボコです。ゴール前は砂地、ところどころに草が生えていますが、その場所は一段高くなっています。つまり、草の根がないところは掘れて砂地になってしまっているの

す。その差、7～8 cmのところもあります。ですから、フリーで走っているのに突然倒れる選手もいます。



ゴール前の攻防。観客もすぐ間近

こうなると戦術も大切。クロスボールでヘディングシュートを狙う、比較的平らなゴール前25mあたりからミドルシュートを狙い、イレギュラーバウンドによるゴール、もしくはリバウンドを押し込む、などなど。ところがそこはカンボジア。ドリブル突破、グラウンダーのスループスを狙い続けます。もちろんボールが弾んで満足にドリブルはできず、スループスも思わぬ方向に飛んでいってしまいます。結局、お互い取りあった1点ずつは、コーナーキックから

のヘディングシュートと同じくこぼれ球を押し込んだものでした。
観客（会場の学校の生徒たちとチームの応援団）も多く、かなり盛り上がっていましたが、盛り上がるポイントはどこかずれています。ゴール前での攻防も盛り上がりますが、それより大きな歓声上がるのが、選手がミスしたとき、小競り合いが起きたとき、足を攣って外へ運び出されるときです。



「PK戦」、ポリスも参加？（もちろん銃持っています）

我々審判は、観客をコントロールすることはできません。その観客のトンチンカンな盛り上がりに乗せられた選手を、コントロールするのはなかなか大変です。しかも、選手がもともと観客と同じ程

度のポリシーしか持っていなければなおさらです。カンボジアの審判が人間的にもっと成長し、どんな場面でも的確に対応し、試合を通して選手にフェアプレーの精神を伝えることができるようになるまで、まだ少し時間が必要です。

※『ソク・サバーイ』とは、クメール語で「元気です」「元気ですか？」（正式にはソク・サバーイ・テー？）の意。